

「木村定三コレクション中国陶磁にみられる煎茶道具と文人趣味」

田畑 潤

木村定三氏は自身のコレクションを使って茶の湯の茶会を開いていた。自身が丑年生まれであることにちなんだ茶会や『莊子』^{しょうようゆう}逍遙遊に登場する鵬^{おおとり}を題した茶会など、様々なテーマで自由に茶会を楽しんでいたことが記録に残っている。一方で、「煎茶」の茶会は、記録はおろか親しい人達の話にも出てこないにもかかわらず、「文人趣味」を盛り込んだ煎茶道具のコレクションが形成されている。

「文人趣味」とは何か。そもそも「文人」とは、学問を修め文章をよくする人を意味する言葉で、中国古典に通じ、琴棋書画を嗜む風流な人を指すが、明確な定義は中国と日本、それぞれの時代によって変化しており、簡潔に答えることはできない。ここでいう「文人趣味」とは、中国古典や漢詩などをベースに「雅俗^{がぞく}（みやびやかなことと、ひなびたこと）」を感じさせる趣味を指し、日本の文人たちが憧れた文人画（南画）や文房具、煎茶道具などをその要素の一つとしておく。本稿では、木村定三コレクションの中国陶磁について、煎茶道具を中心に「文人趣味」の観点から読み解き、中国茶器への憧憬、「倣古」の概念、文人好みの「画題」にまつわる作品、そしてコレクションによる唐物中心の煎茶皆具を紹介する。

中国茶器への憧憬

烏泥茶銚^{うでいちゃちよう}（No. 81 [M1596]）は中国宜興窯^{ぎこうよう}で製作されたもので、カラスの黒にかけて烏泥と呼ばれている。短い注口（鉄砲口）に球形の胴部を持ち、宝珠形のつまみのある蓋付きの急須で、紫砂^{しざ}と呼ばれるなめし革のような粘土を叩いて成形する「拍打法」^{はくだほう}（粘土板を筒状にして叩いて胴部を作る「打身筒」^{だしんとう}（日本では「パンパン技法」とも呼ばれる）によるものである。本作は、明時代末期に流行した漆黒の「烏泥」（紫砂の表層の土を用い、還元炎焼成し、炭素を吸着させたもの）である。宜興窯の作品は「拍打法」により器表面が滑らかに整えられているものが多いが、本作は「梨皮泥」^{りひでい}と呼ばれる素地に砂粒を埋め込む技法を応用したと考えられる。自然な凹凸のある土肌感到趣きがあり、そのひなびた様子が日本の茶人に好まれたのであろう。この種の急須について、奥蘭田^{おくらんてん}（奥玄寶^{おくげんぼう}（1836-1897）幕末から明治時代の政治家、煎茶家）が明治9（1876）年に刊行した名品図録である『茗壺圖録』^{めいこずろく}に、別種「具輪珠」^{ぐりんだま}として記載している。本書において中国の急須のことを茗壺（別称として注春・茶瓶・茗瓶・茶注・茶壺・泥壺・砂壺を挙げている）と呼んでいるが、「具輪珠」の中で特に小さい精品を「茶銚」と呼んでいる。おおよそ明時代最後

の崇禎帝から清時代6代乾隆帝までの作が尊ばれ、京都や大坂の好事家たちが競い合って高値で買い求めたことが記されている。「具輪珠」の多くは無款であることから、本場中国の美意識、価値観とは異なる日本独自の「文人趣味」と結びついた中国茶器への憧憬と捉えることができる。

「倣古」の概念

「倣古」の意味は文字通り古に倣うことを指すが、三代（夏殷周）から秦漢時代の青銅器に倣った器物を主に言う。素材は青銅器をはじめ、陶磁器や玉などにも広がり、その多くは本来の用途の範疇を越え、仏具や文房飾りなどに供される。北宋時代の徽宗皇帝や士大夫階級が中国古代の青銅器に新たな価値観を見出し、復古運動が最盛期を迎え、多くの「倣古」器物が制作された。「倣古」のもととなる中国古代の青銅器は、士大夫階級、文人のステータスシンボルになり、明時代の最盛期とされる5代宣徳帝や、清時代の6代乾隆帝も「倣古」を推し進めた皇帝として知られる。青磁三足炉（No. 22 [M1240]）は、龍泉窯や景德鎮窯、または南方産の可能性がある大型香炉である。その形状は、漢代の青銅器である「温酒尊」または「奩」と呼ばれる筒型の胴部に三足が付く酒器または化粧道具入れを模したもので、宋時代以降、倣古の器として香炉用に制作されたと考えられる。明治時代の日本の煎茶席において、火炉・瓶掛として転用されていることが、当時の茶会記である名謙図録から知ることができる。本作品も内部に入れて使用した灰も残されており、湯沸しを掛ける瓶掛として転用された形跡がみられる。

文人好みの「画題」

文人画の主題である「画題」とは、中国憧憬の山水や花鳥など視覚的、物質的なものに対して文学的、精神的教養を付加するもので、取り合わせる数字を基本にした「名数画題」や語呂合わせの「謎語画題」などがある。「画題」は文人画や道具のほかには花や盛物など席飾にいたるまで、文人趣味の趣向を高めるものとして盛り込まれている。三彩鯢文水注（No. 79 [M1556]）のように二色以上の多色釉を「三彩」または「交趾」と呼ぶ。「交趾」とは、もとは交趾（ベトナム）産の陶磁器を指す言葉として用いられていたが、中国南方産の三彩を指すようになった用語であり、本作品は広東省石湾窯で制作されたもので、鉛釉の緑釉と黄釉が掛け分けられている。胴部は型成形の貼り合わせで、真上からみると六角形を呈している。胴部六面の窓絵のうち二面を「鯢」とするが、「鯢」は日本の国字で、中国では「鰐魚」と呼ばれ、魚が龍に変化しつつある龍頭魚身の姿で表され、中国南部の火除けを意味する伝統的建築装飾の中にもみられる。本作品には「名数画題」が盛り込まれており、窓絵には「鯢」の他に「菊」「蓮」「梅」「蘭」の「四愛」が施されている。また、竹節状の吊り手が施されていることから、「梅」「蘭」「菊」に「竹」を加えた「四君子」にもかかっている。「四愛」とは、元時代の文学者である虞集（1272-1348）の『四愛題詠序』の「陶潜愛菊、周茂叔愛蓮、林逋愛梅、黄魯直愛蘭也」（陶潜（陶淵明

(365-427)、東晋末～南朝宋初の詩人)は菊を愛し、周茂叔(周敦頤(1017-1073)、北宋時代の儒学者)は蓮を愛し、林逋(林和靖(967-1028)、北宋時代の詩人)は梅を愛し、黄魯直(黄庭堅(1045-1105)、北宋時代の詩人)は蘭を愛す)による語からきており、「四君子」は、明時代末期の書家、画家である陳繼儒(1558-1639)の『梅竹蘭菊四譜』の「四君者」に始まる呼称で、「梅」「竹」「蘭」「菊」が草木や花のなかでも気品があり高潔であることを君子にたとえたものとして、文人画の画題として好まれた。

木村定三コレクションによる煎茶皆具（唐物中心）

煎茶の道具組は唐物が好まれ、日本でも多くの写し物が作られた。また、中国古代の器物を煎茶道具に転用することも多く行われてきた。茶銚や茗碗をはじめとする小さな器や、青花や青磁、五彩といった色とりどりの取り合わせは華やかであり、独特の世界観が作られる。このような道具組は、中国茶器への憧憬を形にした日本独自の煎茶文化の中で発展してきたものといえる。挿図は、木村定三コレクションの中から唐物を中心とした道具組である。紫泥茶銚（宜興窯、No. 80 [M2245]）を瓶床に乗せ、青花梵字文茗碗（徳化窯、No. 83 [M1558]）五客が盆の上に、左手前に清時代の稜花形托子が並ぶ。中央奥の瓶掛は青磁三足炉（龍泉窯風、No. 22 [M1240]）を転用したものであり、中国南方産の湯罐（No. 82 [M1555]）をかけている。右奥には三彩鱗文水注（石湾窯、No. 79 [M1556]）と陽刻楼阁山水図巾筒を、左奥には唐物写しの稜花形茶心壺と斑竹茶合を置く。右手前には巾器見立ての五彩花卉文角杯（景德鎮窯、No. 38 [M1652]）、器を清めるための洗瓶としての青花唐草文水注（景德鎮窯、No. 85 [M1593]）、こぼしとしての青磁建水を取り合わせた。

木村定三コレクションには、書画や中国陶磁のほかにも日本陶磁や木漆器、金属器などにも「文人趣味」を背景とした作品が数多くみられる。美術品への蒐集精神に揺るぎないものを持っていた木村定三氏の「文人趣味」とその審美眼は、限られた煎茶道具の中にもその要素が多分に盛り込まれていることから間違いないことがわかる。

（愛知県陶磁美術館学芸員）



煎茶皆具（唐物中心）